

第14回学習集会開催

～卒業生の姿から学ぶ放課後活動の意味

～北区赤羽会館大ホールに124名が集う～

去る5月31日、北区赤羽会館において、放課後連・東京「第14回学習集会」が開催されました。

今回のテーマは、「卒業生の姿から学ぶ放課後活動の意味」です。ここ数年、加盟グループ内で、放課後グループを卒会した青年・成人期の人たちの活動を何らかの形態で実施しているグループが増え、定例会などで話題にあがることも増えてきました。そこで、彼らの姿を様々な立場から見据え、そこから振り返って放課後活動の重要性が浮き彫りになるような機会にしたいとの思いから、このテーマを設定しました。

当日は、保護者、指導員、関係者124名が集い、学び合いました。

<フリーディスカッション>

前半は、保護者・作業所職員・放課後施設指導員の3の方が、それぞれの立場からフリーディスカッションをしていただきました。

発言して下さったそれぞれの方のお話をまとめて報告します。(文責：放課後連・東京事務局)

フリーディスカッション発言者

〇さん(大田区：ゆめクラブOB)

庄司 完さん(小平市：あさやけ作業所職員)

近藤すみ子さん(世田谷区：わんぱくクラブ指導員)

◎長い年月を経て幼なじみから友だちに

～近藤すみ子さん

「わんぱくクラブ」を卒所した44名の成人が通う「ひかり」。カラオケ・ボーリング・夕食づくりなど、毎月初めの話し合いで活動内容を決めます。その中でめざしている大きな目標は「仲間作り」。学齢期の「わんぱく」の頃から10～15年かかって、幼なじみがやっと友だちになったという感じだとのこと。「余暇」という言葉では単純に表せない内容の活動です。

長い年月をかけて関わる中で、仲間の中で変わってきた青年たちの姿を紹介していただきました。

小学4年生で入所し、現在23歳になるMさん。入所した当初は、活動に誘っても「やらない」と言って大泣きし、紙をちぎって食べてしまうこともあった。仲間の中でいろいろと働きかけ、リーダーをやるよう

放課後連・東京ニュース

《No. 84》2009年7月13日
障害児放課後グループ連絡会・東京
(放課後連・東京)

江東区扇橋3-3-7 2階 さくらんぼ子ども教室内
〒135-0011 TEL・FAX 03(5683)0871

にまでなってきた。「わんぱくコンサート」の舞台挨拶を彼女に頼もうということになった時も、「やる」と言って立ち上がり、舞台上で堂々と「どうぞよろしくお願いします」と挨拶をした。

中学1年で入所したM君。入所当初は、カルタ取りで1番でないはずね、歩けないと座り込む。宿泊では、電車のホームに寝そべってしまったが、2年目には、「みんなに迷惑かけないように歩くよ」と言い、年々頑張るようになってきた。誰かに八つ当たりされて、「～ちゃんがやった」と母に言っていたのも、最近は母から話を振られて「～ちゃんは大変なんだ。僕は平気」と答えるようになってきた。

小学1年で入所し、31歳になるY君。自閉的傾向が強く、本人の隣に座らせてくれるようになったのが高校1年の時。けれども、生活力があり、スタッフ1人で6～7人を連れて外出する時には、彼もスタッフと同じようにみんながいるか確認していた。スタッフが足りないから、(自分が頑張らなきゃ)と思っていたようだ。去年くらいから、誰かが何かをすると怒るよ

うになった。やっと自分が出せるようになり、わがままや感情も出せるようになってきた。



◎はたらき続けることで獲得するもの

～庄司 完さん

1974年に開所し、現在52名が通所する「あさやけ作業所」。まだ「就学免除」があった時代から、障害の種別や軽重に関わらず、「働きたい」という願いをもとにした作業所作りをしてきました。働けるかどうかという評価でなく、「あさやけ」に馴染めるかどうかの方が大事。そして、みんなと同じ仕事の輪にすることが大事。そのため、補助具も1人ひとりに合わせて工夫をし、あくまでも「働く」ことを追求しています。けれども、35年前から、工賃の額はあまり変わっていません。利潤追求ではなく、仕事を通しての集団作りに重きを置いているからです。

そのような中での事例を紹介していただきました。

入所して2年目になる20歳のAさん。情緒不安定なところがあり、作業所には週2～3日の午後通所している。卒所した「ゆうやけ子どもクラブ」のOB会は毎週火曜日に必ず行き、そこを支えに生活のリズムが作られてきている。入所当時は、職員にべったりで給食も食べられなかったが、根気よく通い続けること

で、「～ちゃんは？」と他の利用者を気にしたり、給食も1人で全部食べ、昼休みをみんなと一緒に過ごしたりするようになってきている。

22歳のK君は、誰かに何かされると、「エーン、エーン」と泣く。お節介な利用者に「この仕事はやるな」と言われ、いじめられたと思って泣いた。けれども、そのうちに「オレの仕事を取った」と言うようになった。それからは泣くのではなく、職員に悪態をついたり、八つ当たりしたりするようになった。人との関わりから、仕事に対する意識が芽生え、人に対して思いを表すようになるなど、心の成長が見られる。

児童施設に20年間入所していたTさん。グループホームに生活の場を移すとともに「あさやけ」に入所した。知的障害・自閉症・脳性麻痺。思いどおりにならないと物を投げる（テレビを6台も壊したことがある）。市の担当者には「(障害が重いため、ふさわしい場合は)作業所ではないだろう」と言われた。しかし、「ここで受け入れなければ、働く経験はできないだろう。長い目で見ていこう」と職員間で話し、働く場を保障しつつ、医療機関やグループホームと連携をとり、生活を見てきた。1年後には、物を投げることがなくなり、作業中座っていることさえできなかったのが、作業に気持ちを集中できるようにもなっている。

◎子どもと同じように私にも仲間ができた

～Oさん

お子さんのYさんは現在27歳。日中は授産施設に通い、日曜日や仕事帰りには、「STEP」に参加し、コーラスや仲間とおしゃべりを楽しみます。

小学生の頃のYさんは、自分が1番でないと気が済

まず、友だちとのトラブルも絶えず、お母さんは悩んでおられたとのこと。先生の勧めで、小学5年の時、「かたつむりクラブ」に入会しました。いろいろなことを友だちと一緒に楽しむようになり、生活にメリハリがついてきたそうです。

中学生になって1年ほどたった頃、Yさんが、「私は中学生。小学生と一緒にイヤ」と言ったことがきっかけとなり、中高生対象の「ゆめクラブ」が立ち上がりました。学校は授業が厳しく、Yさんにとっては頑張る所でしたが、「ゆめ」はいつでもスタッフが自分を受け止めてくれる、ホッとできる場でした。仲間作りを意識した活動を積み重ねることで、仲間への思いやりも少しずつ芽生えてきたとのこと。

子どもの成長に伴い、その時々に必要な活動の立ち上げに関わってこられたOさん。保護者同士で、「こんな活動があったら」「うちの子はここが苦手なので力をつけたい」などと本音で話し合い、そのたびに「大変なのは自分だけではない」と勇気づけられたと言います。「Yさんにとっても仲間ができたように、私にとっても大切な仲間です」と話を締めくくられました。

また、Yさんご本人から、活動の様子や思いを作文で発表していただきました。その堂々とした姿に、長年かけて培ってきたものの重みを感じました。



最後に、問題提起も含めて、まとめのお話をさせていただきました。

▼近藤さん — 「ひかり」ができたきっかけは、1人の子の卒所。その子は、「わんぱく」に入る前、学校から帰るとパジャマに着替え、共働きの父母が帰ってくるまでカセットテープを聞いていた。その生活に戻したくないとの思いから「ひかり」を立ち上げた。年々、通所者が増えて運営が大変。公的補助は区からの家賃補助(月10万。昨年度から)のみで、会費・バザー・居宅支援などを利用して何とかやっている。別枠で移動支援もやっているが、1対1対応で仲間作りという内容にはならず、お金は入ってくるけれども、それを進めるのが果たしてよいのか。これから先どうするかを悩んでいる。

▼庄司さん — 作業所から帰ってご飯を食べるだけの生活をしている人がいる。社会資源が作業所しかなかった世代の人は特にそうで、家に帰ってすることがない。簡単には解決しないが、時間の使い方が生活の充実につながり、それが仕事の充実につながる。逆に危惧するのは、移動支援などで、お金を払えば時間を使って何でもやってくれるという感覚。子どもの将来にとっては、集団があって、みんなと一緒に本当に楽しいという活動をどう作っていくかということも大事。子どもの成長は権利。今の応益負担との関係では、基本的な権利に対してお金を支払うということに憤りを感じる。学齢期は、遊びや学習の時代。その時代にしかできないことが必ずある。学齢期にうんと遊んで、うんと楽しむことが大事。そこで培った力が卒業後に、「自分は働くんだ」という見通しを持って気持ちを切り替える力になる。

<講演> 一人ひとりが人生の主人公

講師:白石恵理子氏

後半は、滋賀大学教授の白石恵理子先生にご講演いただきました。前半のフリーディスカッションの内容にも触れながら話をさせていただきました。

◎発達とは、自分を新しく作り直すこと

古い自分を壊して新しく自分をつくり直すのが発達。発達していくプロセスでは、矛盾にぶつかり、エネルギーを使い、問題行動として出ることもしばしばある。けれども、長い目で見ると、それを乗り越えて成長していくプロセスが見える。きょうのディスカッションのように、いろいろな立場の人が話し、今を見据えながら未来をつくっていくのはとても大事なことです。次のライフステージでの新たな課題を乗り越えるために、何が必要で、どんな支援ができるのかなど、話をする中で見えてくるものがある。

◎その時期らしく輝くことの大切さ

ある特別支援学校で、5人の子どもが5ブースに仕切られた中でそれぞれの作業をしていた。作業所では、職員に丁寧に見てもらえる状況ではないので、仕事に1日向かえる力を今のうちに付けていると先生は言う。作業所の職員は、「作業の技術的な面は必ずできるようになる。学校時代に時間をかけてしなければいけないのはそこではない。人を好きになったり、自分をよいなと思ったりできるような経験をすることが大事」と言ってくれた。そういうことは、すぐに身につくことではない。それぞれのライフステージの課題がある。その時期らしく輝くことが、成人期をつくる力になる。

◎権利である発達を保障するために

発達は権利。障害が社会的につくり出されている側



面が現実にはたくさんある。その背景にあるのは、障害を本人や家族の問題として還元する考え方。

ある保護者の意見陳述書—知的障害を伴う自閉症の息子。養護学校卒業後はデイケア施設に通い、障害が重くとも成長していると感じていた矢先、父親の入院・他界。大好きな父親に会えない、引っ越しという変化に耐えられず、異食・服破り・水へのこだわりなど不安定な状態が続いた。水のとり過ぎで中毒になり、意識混濁で入院。安定剤を30錠服用し、病院では拘束。退院後、「施設の中でやれることがあるのでは。どんなに障害を重くても諦めない」と、職員が一丸となって信頼関係を築いてくれた。怪我をした時も施設で24時間付き添ってくれた。職員の必死の思いが伝わり、息子は楽しそうに落ち着いてきた。母にとっても心の支え。障害者自立支援法は、障害者福祉をサービスだとしている。力での制止ではなく、24時間寄り添ってくれた職員の支援を、商品でサービスだとはとても言えない。

サービスをあれこれつないだら、発達が保障できるかと言ったらそうではない。系統的な働きかけ、職員集団があるということが大事。

◎思春期一拒否できることの大切さ

人間だけにある思春期。大人になるための準備をし、その時期にふさわしい教育を受ける権利があるという積極的意味がある。先ほどのYさんの、「小学生と一緒にイヤ」という思いを大事にできる場があることが必要。一方で、思春期ならではの困難さもある。発達要求としては、自分のタイミングで決める・選ぶなど、行為の主体となる自分を獲得し直したいのに、うまくいなくてイライラしたり、今までできたことができなくなったり、他者との関係では依存的に甘えたり、拒否したりという時期がある。

素直で困らせないから問題がないなどと、発達を形だけで見るのでなく、その人の思いや拒否できる力などを丁寧に育てていくことが大切。それらが、その人の行動の軸となっているかどうかが大変なこと。

放課後施設は、学校よりも自由度が高い。その中には、活動に参加しない、拒否する自由というものもある。けれども、口では「やらなくていいよ」と言いつつも、やらなければいけない雰囲気があったりもする。狭い枠組みの中での選択を迫っていないか。本当の意味での自己決定、思春期・青年期を支える放課後施設の持つ意味について、ぜひもう1度検討してほしい。

◎長い目で見守る

障害の軽重で分け隔てされるような状況の中、働くことの意味など、実践の中で確信を持ってきていることを、地域や行政に訴えていくことが大事。20年・30年ものあいだ、子どもたちの育ちを見守っている人が、親以外にいるというのはすごいこと。その中で育っていく人の生きた姿をこれからもぜひ全国に伝えてほしい。

◎◎参加者の感想から◎◎

- ・皆様が切り開いてきた大変な道のりや、時代背景を感じ、身が引き締まる思いがした。放課後クラブ卒業後の子どもの姿を、今までは“ぼんやり”とした形でしか思い描けなかったが、成長した姿、余暇活動の大切さを改めて認識した。(保護者)
- ・「ひかり」の活動は、大変な問題がつかないと思うが、ぜひ継続・発展を続けて、私たちの道しるべとなしてほしい。(保護者)
- ・卒業であっても、集団の中での継続的な経験が発達につながることで、移動支援の1対1とは別の形での余暇活動の必要性、そこに対する保障や補助が現在ないという点についても声を上げていく必要性を感じた。(保護者)
- ・庄司さんの、「学童期につけてほしい力は、人とうんと楽しんでいろいろな経験をすること。それが、働く場で見通しを持って頑張る力になる。その時期にしかできないことを身につけてほしい」という話が、今やっていることの裏付けをしてくれているようでうれしかった。(指導員)
- ・「どんなに障害が重くても、時間はかかるが、必ず成長する」という庄司さんの言葉が希望になった。そう思っていたが、卒業後の施設職員から聞いて、心強く感じた。(指導員)
- ・「ひかり」のようにならなくて、悩んでいる所は多々ある。私もそう。ぜひまた卒業後の余暇活動について話を取り上げてほしい。そして、何度も立ち返るべき発達の見方・とらえ方についても取り上げてほしい。白石先生が最後に、必ず指導員にエールをくださるのがうれしく、励まされる。(指導員)

- ・白石先生が話された、ある親御さんの言葉が印象に残った。「親は、子どもが幼児期は“当事者”。子どもの痛みは私の痛みで、一心同体だった。子どもが学校に行き、教育の部分を先生に任せようと思えるようになり、親同士の交流もできた。子育てをしているという思いを初めて持てるようになり、私はようやく“保護者”になれた。子どもが成人期になり、私は“よき理解者”、ともに歩む人となれた」。(保護者)

活動報告 (2009年2月～2009年5月)

- 2/12(木) 事務局会議
- 16(月) 定例会 :
- 22(日) 全国放課後連都道府県連絡会議
- 3/5 (木) 事務局会
- 9 (月) 定例会 : 実践報告会 (きよせわかば)
- 17(火) 学習集会発言者打ち合わせ
- 4/23(木) 事務局会議
- 26(日) 障都連総会出席
- 27(月) 定例会 : 実践報告会 (ほおずき)
- 29(祝) グループ連総会出席
- 5/14(木) 事務局会議
- 12(火) 学習集会発言者打ち合わせ
- 31(日) 第14回学習集会

※定例会議・事務局会議は、いずれも角筈区民センターで行なう。